第525号 平成元年3月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1989年（平成元年）
3月号（No. 525）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

科学研究委員会講演会報告……（1）
「チョモランマ登頂時の気象」
海外の山……（2）
「オートバイでアコンカグアへ」
「キリマンジャロ登山」
木暮碑建設の年について
望月達夫……（3）
報告……（5）
「フリートーキング　この人と山を語ろう」他
自然保護随想……（6）
「建物の外側はだれのものか」
東西南北……（6）
「三水会恒例の新年山行」「一枚の写真」「会員通信特集(1)」他
図書紹介……（10）
「縄文杉は訴える」「白鳳」「双星の輝き」「北海道の自然」「山岳技術考」「大雪山」「山旅素描」
新入会員・住所変更等……（14）
会務報告・ルーム日誌他……（14）
お知らせ……（14）
図書委・高所登山委・総務委他
カット／牧　潤一

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテープ電話
234 六六五九

科学研究委員会講演会報告

チョモランマ登頂時の気象

日時　一九八八年十二月九日（金）
午后六時半～九時
場所　日本山岳会集会室
講演題目と講師
チョモランマの気象
日本気象協会予報部　奥山　巌氏
現地における気象観測と天気予報
広島女子大学教授　宮田賢二氏

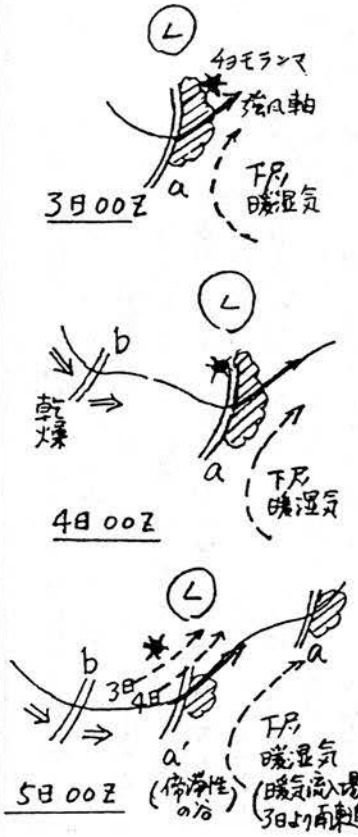
三国友好登山隊は素晴らしい天候に恵まれて五月五日、チョモランマの交叉縦走と、テレビ生中継に成功した。今回の遠征隊に日本から気象情報を送り続けた奥山予報官と、現地で観測と天候の判断に当った宮田隊員に実状と今後の希望など話して頂いた。

●チョモランマの気象

気象協会としては現地の予報は行なわなかったが、三月中旬から五月中旬まで半日毎の三〇〇mb及五〇〇mb天気図と天気情報、ならびに上層の気圧の谷（トラフ）の通過日の予想コメントを送った。四月に入ると強風軸がヒマラヤの北側に移ったため、風も弱まり、気圧の谷の一日乃至半日前から天気が崩れ、トラフの通過とともに恢復した。

ところが五月五日は谷の通過直前であったにもかかわらず晴であった。これは図のように三日から四日朝にかけて通過した谷(a)には南から湿った気流が入り、降雪となったが、その谷が東に抜けると共に、上層の強風軸が南下して、南からの下層暖湿気流も南東に動いた。このため西から進んで来た谷(b)はチョモランマ（黒星印）の南側を通り、寒気だけの乾燥した谷、つまり悪天を伴わないトラフとなった。

これより前、中国のラサ気象台からは五日は悪天が予想されるので、三日までが登頂のチャンスとの予報が流れ現地では大分議論になった由である。



で、五〇〇mb天気図をきめ細かく解析する必要があり、またラサとチョモランマは距離がかなりあること、チョモランマの地形なども考慮する必要があると痛感した。

●現地における気象観測と天気予報

南北の隊に二名ずつ隊員を配し、一応昼間三時間毎の基本的データはとれた。しかしバルーン観測などはできなかった。一方気象協会からの情報と、私共も四日夕方になって漸く五日は晴天とのコメントを送った。

チョモランマといった特定地点の予測を行なうには、現行の計算機予測だけではまだまだ不十分

中国・ソ連からの五〇〇mb天気図が入手できた。

私どもは高層天気図の谷（トラフ）と峰（リッジ）が北緯20°～30°付近と50°付近でどのように移動するかをグラフにして予報を試みた（チョモランマは28°）。その結果、四月五日～二十五日の間は50°では谷が規則的に東に移動するのに、20°～30°では停滞、このような状態はある程度予測できた。ところが四月二十五日～五月五日の間は北側の動きが不規則、南側は東に移動を始めたもののベンガル湾トラフ付近に小さい乱れが生じ大変難しくなった。五月四日の夕方、漸く五日は「晴後曇」の予報を出した次第である。

ロンブクとクーンブで様子が異なり、クーンブの方が悪かったが、今後は地形の影響を考慮した天候の判断も必要と考えられる。また遠征隊は簡単な百葉箱を持参する必要も感ぜられた。

講演後の質疑応答で、大井氏から、現地の天候予測は雲の形や動きを観察する観天望気を行なうことも極めて大切とのコメントがあった。また八千㍍峰に対しては五〇〇mb（高度五七〇〇㍍）と共に三〇〇mb（高度九五〇〇㍍）の天気図も参考にした方がよいとの意見もあった。

海外の山

オートバイでアコンカグアへ

地球の裏側にある南米大陸最高峰アコンカグア（六九九五㍍）は、日本の冬山シーズンにあたる十二月から一月にかけてが、夏山シーズン最盛期となる。今年も米国の五十二隊、日本の十一隊など各国から二百十一隊が、入山した。

一月中旬、オフロードライダー、風間深志（三九）の隊が、標高四二三〇㍍のプラザ・デ・ムーラスのBCに入った時も六十五張りのテントで賑わっていた。しかし、夏山気分はあまりなかった。「十年ぶりの大雪」でアコンカグアの標高五千㍍以上は全山、雪におおわれていたのである。

オートバイでてっぺんまで登ろうとやって来た風間にとっては、とりわけ厳しい条件となった。出発前、雪を想定しなかったわけではないが、風で吹き飛ぶ程度のものなら二輪でも這い上がれるだろうと特に車体に細工はしてこなかったのだ。しかし、現実には雪は固くへばりつき、人であれ車であれ、上部をスパイクなしで行くことは、まず不可能に思われた。

高度順化トレーニングを繰り返した後、C1を五二〇〇㍍地点に作った。他の登山者のたどるルートと離れて、岩と雪のミックスした急斜面をのろのろ登る。一月二十九日、五五〇〇㍍地点まで達してオートバイでの登頂を諦めた。

この後、アイゼンをつけて二本足で登ったが、結局六五〇〇㍍が最高到達点となった。気温はマイナス二十五度に下がり七千㍍峰の夏山の厳しさを思い知る。

「二十年間自分の体の一部としてきた二輪を使って、最大限自然の中での行動の枠を広げてみたい」。二年前、世界で初めてオートバイで北極点にたどり着いて名を馳せた風間は、高峰にオートバイで挑戦するという一見荒唐無稽な試みについて、しばしばそう語っている。

一九八〇年、オートバイ誌のライターをやめ、二人の仲間とアフリカ最高峰のキリマンジャロ（五八九五㍍）に登ろうとしたのが、最初だった。通常のルートは許可が取れず、ジャングルの中を時にロープでオートバイを吊り上げて巨木を乗っ越すような芸当までやったが、頂上まではたどり着けなかった。

その後サポートなしでパリーダカール・ラリーを完走して自信をつけ、エベレスト（チョモランマ）には、南北両サイドから挑戦。北側からの高度六千㍍が、到達最高度記録となった。

岩がごろごろころがっているような所を一個一個攀じ、あるいはジャンプしてじりじり高度をかせぐ。並みの感覚では信じがたい二輪の世界がそこに展開する。無論、静寂を好み、自然保護に敏感な登山者からはあまり歓迎されない。

アコンカグアでは、他の登山者が全て出発してから、できるだけ距離をおいてスタートした。ちょっとでも先行者が見えると、止まって一定の距離を保つようにした。「テントでは仲良く話していても、いざ空気の薄い所を登るとなれば、ハエでもうるさいですからね」。

動力、というものがどの程度まで山の世界に入りこむことを私たちは受け容れられるだろうか。（江本嘉伸）

出席者 奥山巌、宮田賢二、中世古隆司、大塚博美、吉川友章、大井正一、藤原滋水、広瀬潔、岡野修、松村潤、小山勉、田久保勇治、城所邦夫、鳥居亮、織田沢美知子、田村宏明、石井恵美子、松丸秀夫、高橋詢、高遠宏、中村純二、石田要久。 **（中村純二）**

当日使用された予稿集（一八頁）入手希望の方は、本委員会宛郵送料まで含めて四百円（切手も可）送って頂けばお届けします。

（科学研究委員会）

木暮碑建設の年について

望月達夫

本会創立七十周年記念事業の一環として、先年覆刻された日本の山岳名著には、『覆刻 日本の山岳名著 解題』（昭和五十年十月刊）が添付されているが、そのなかで私の担当したのは木暮理太郎『山の憶ひ出』上下巻であった。

私は内容の解題のほかに、木暮さん没後金山に建設されたレリーフ（木暮碑）についても簡単に触れておいた。

建設された年月は昭和二十六年五月が正しいのだが、それを私が昭和二十五年と誤記したため、爾後右文献を利用される方々が、屢々木暮碑の建設年

海外の山

キリマンジャロ登山

—長野県飯田高校山岳部OB会の場合—

伊藤敦

一九八八年八月十日、マランゲイトから入山したわれわれ飯田高校山岳部OB会（もと教え子三人と私）は、他のグループの五名と同十三日にメイヤーズケイブを経由してキリマンジャロ・ギルマンズポイント（五六九〇㍍）に達し、十四日マランゲイトに帰着した。

タンザニア観光局では、高度順応のため三八〇〇㍍のホロンボハットで二泊し、トータル六泊七日の山行を推奨しているが、米国の元大統領ジミー・カーター氏夫妻一行の入山のため、一般登山者を急遽足どめした余波を受けて、四泊五日でやる破目になった。

そのため九名のうち二名は、五〇〇〇㍍地点で高山病が悪化し、登頂断念を余儀なくされた。全員登頂はできなかったものの、アフリカの最高峰に岡山大学ワンゲルOB会や岐阜山渓辿路会の皆さんと共に、力を合わせて登頂した喜びは、生涯忘れることはできない。

1 カーター氏一行と遇う

ケニヤから国境の町ナマンガを経てタンザニアに入り、マウントメルーの優雅な山麓を南東に回りこむと、真紅のブーゲンビリア、紫色のジャカランタが清楚に咲くアリューシャの町だった。そこから一時間半も進んだ時車は急に速度を落した。

十五、六台の車の行列がフルスピードで北上していた。歓迎とも送別ともつかぬ沿道の人々は、二十歳以下の兵士たちで、車の列はカーター氏の一行であるとドライバー氏が説明してくれた。

八月十日、日本を発って五日め、やっと入山にこぎつける。マランゲイトのブッキングオフィスで入山確認をしていると、コッコッと鶏の鳴き声がする。見ると羽交締めされた鶏が十数羽、ダンボールの箱に入れられており、これがわれわれの食糧の一部と聞かされた。

この国のきまりで、たった九名のわれわれに二十二名から成るガイド・ポーターのファミリーが付いた。ゲイトには銃を肩にかけた兵士が見張っている。

2 二十一時間余の行動

一日めは樹林帯をマンダラへ、二日めはアフリカは冬だとは言えエリカやムギワラギクの美しく咲く草原帯をホロンボへ、三日めは前衛の高原の上に、初めて氷雪光るキリマンジャロ峰が姿を見せてくれ、砂礫帯をキボハットへ。四日めは零時起床、一時半発、七時二十五分登頂。マイナス八度C、強風。

さて、これからが大変だった。六時間登りつめた急坂を一気に五十分でとって返し、キボハットで一時間半の休息のあとホロンボへ四時間半、マンダラへ雨中の五時間半、完全に歩きづめとなった。

ホロンボからは薄暮となり、セネシオやロベリアの巨大な影が何となく無気味である。皆うらめしげに無言のまま歩く。八時ころ右手にモシの町の明りが美しくまたたいて見えたが、マンダラまでは更に一時間半を要した。

標高差千メートルを登り、三千メートルを一気に下る二十一時間余りの行動は、初めての体験だったが、それ以上に雨の夜キリマンジャロの大草原を無言のまま歩いたすら歩んだ記憶は、生涯消えることはないだろう。

3 海外協力隊員の墓石

マランゲを発った十五日、一昨夜見た明りのモシ町から十五キロ西のあたり、日本の若者の墓があると聞いて車を停めた。

海外の山

を昭和二十五年と書かれているのを知った。解題出版後すでに十余年を経ているので、私は右を少なからず気にしつつも、ついつい放置しておいた。

ところが、最近も私の熟知する友人が右にもとづいて、ある雑誌に昭和二十五年と書かれているのを知り、これはどうしても私自身訂正しておく必要があると痛感して筆を執った。

偶々『山岳』前号（第八十二年）に、小野幸さんが「木暮碑以前」の一文を寄せられ、木暮碑建設までの事情が委曲を尽して述べられている。それによるとレリーフは昭和二十六年五月六日に金山で除幕式が行なわれた旨が明記されていて、それが正しいことは勿論である。ところが木暮さんについて調べる場合、先の拙文が案外便利なためか、それによって今後も昭和二十五年五月が引用される場合があり得ると思われる。よって、該書二三八頁の昭和二十五年を二十六年と、また七回忌とあるのを八回忌に訂正する。

本稿執筆の目的は以上で尽きるのだが、ただ一言、私として付記しておきたいことがなくはない。私は元来、年月、個有名詞等歴史的な記述は、記憶等に頼るべきでなく、據るべき文献にもとづいて記述するのを建前としている。

よって拙稿は、当時の本会々報第一五六号所載の「木暮翁紀念像建立」の一文（筆者はT・Fとあるが、藤島敏男さんのことは明らか）に依って書いた。それには五月六日とだけあって年号の記載がなかったため、右会報の奥付の発行年月を見たところ、そこには昭和廿五年七月二〇日とあったので何のためらいもなく、その年号を書いてしまった。当時の編集者は織内信彦さんで、私の古くからの友人であり、物事を綿密に処理される人でもあったから、少しの疑いももたなかった。因にその前後の会報は昭和廿六年となっていて、偶々この号だけが廿五年と誤植されており、どうしてそうなったのかは判らない。

ただ当時の会報の第一頁は創刊当時とほぼ同形式で、一九五一年七月の文字が横組みされている。そこまで注意して私が見ていれば、一九五一年は二十六年だから奥付の年号との齟齬に気がついたろう。私の調査が聊か疎漏だったと言われても返す言葉がない。しかし一般に文献を利用する場合、奥付の年月まで一々たしかめることは、先ずやらないのが普通であろう。

また当時既に刊行されていて、私も

海外の山

日本人海外協力隊の六人とタンザニアの友は、一九八五年十一月二十一日、ここで交通事故に遭遇―と記されてあった。日本を出て一年、異国の地に献身して帰国しようとした前夜、あたら惜しい若い生命。

尊い任務へのひたむきな努力、ひたすら誠実に尽した若者たちの純粋な心。彼らの美しい命がアフリカの大地にキラキラ光って見えた。

われわれは八月二十一日帰国した。

帰国して二、三ケ月というもの、齷齪することも怒りを覚えることもなかった。アフリカの大きさ、キボ峰の雄大さは、私の生涯に悠々閑々にして悠々自適の有り様を教えてくれたと思っている。

4　高校山岳部OBの海外登山

わが国では欧米先進国のような「社会体育」が、機構的にも財政的にもまだまだ未発達で、学校教育に依存する度合が大きい。このような状況の中では、学校を離れて社会人になった途端に特定の企業を除いて、スポーツは単に趣味的なものになってしまう。

登山について言えば、しかるべき山岳会に所属しない限り、トレーニングも海外登山のチャンスも少くなってしまいがちである。

われわれの場合、教員である私が一番恵まれていて、山岳部顧問として日常的トレーニングが可能だった。ところが、東京の半官半民オフィスから、岡崎の民間企業にまで点在するOB会員にとっては、朝晩の走りこみやなわとび、サーキット運動などを、どう組み立て、どう実践を持続させるかが鍵で、一重に〈個人の意志〉の問題にかかってくる。もちろん仲間同士時々電話でチェックしあったりもした。

さてつぎに、十五日間の休暇確保の問題である。私の場合は文句なし、南アルプスの夏山行引率を早目に終えて夏休中に確保できたが、他の会員の場合は大変だった。

当初十名を超える希望者があったのに、休暇調整不可で多くがリタイヤしてしまった。結局参加した者は、年休を注ぎこみ、かつお盆休みを間にはさみこむ形で、辛じて諒解を得たようである。

今更ながら欧米先進諸国のバケイションが羨ましく思う。働きすぎと言われるわが国でも、少くとも二週程度以上の連続休暇と、どこへ何しに行こうとお互いに干渉せず、保障しあう理解がほしい。

いつ日本はそこへ追いつくのだろう。

座右において重宝していた『世界山岳百科事典』（山と渓谷社刊）をも見た記憶があるが、木暮理太郎の項は山崎安治さんの執筆になり、そこにも昭和二十五年とあったので、それも私が二十五年と書いた理由の一つかと思われる。

会報の誤植は、俗にいう「校正発行年恐るべし」のたぐいと言おうか。勿論、今さら織内さんにとやかく言う気持は全くなく、自らの戒めとするのみである。

（一九八八年九月）

報告

フリートーキングの集い

「この人と山を語ろう」

青懇・婦懇委　共催

日時　二月二日（木）
一八・三〇～二一・〇〇

場所　集会室　参加者三十一名

青懇・婦懇委共催のこの企画は、シリーズとして第三回目。今回は講師に今井（高橋）通子さんをお迎えして盛会であった。当夜の感想を芳野菊子さんに寄稿して頂いた。

＊

翔んでる女性、文字どおり最近は山頂からのパラグライダーでの飛行に挑戦しておいでの今井（高橋）通子さんが、つかの間の着地のひと時をルームでの集いに参じて下さった。

会の開始に先立って配られた今井さんの「登山歴」に記された記録は、どの一つをとっても、常人の遠く及ばざるものばかり。ただひたすらにこの記録を目指しての今日までの日々であったのだろうとはだれもが想うところであった。ところがお話しを伺っているうちに、それらがきわめて自然に、無理なく達成されたものであることを知り、改めて感じ入った。

健康のためにというご両親の配慮が、自然との出合いであり、それが心の健康のベースになって今日の今井さんがあるのだと思った。

いつも自分の能力に見合った範囲で、その時々の気分で、無理のない山登りをしながら、一方で自分の可能性の限界を拡大していらしたという。

その能力のすばらしさゆえに、追求した可能性のその時々の限界が、あのような記録になったのだと納得した。

これもその能力のうちに数えることになるのだが、今井さんのすばらしさは、医学者としての識見とそれに基づく判断力である。生理学的に健康を管理しながら、人事管理のできるリーダーシップは男女の性を超えたところで機能することを知った。

国際理解というが、自然こそ世界中の人間が共通に話題にし、理解することのできる対象ではないか。自然のすばらしさを熟知したわれわれは、それを次の世代に受け渡していく務めがあるのではないか、と熱っぽく話を結ばれたのが心に残った。田部井さん差し入れのワインやビールを喫しながらの、あっと言う間の二時間半であった。

（芳野菊子）

クスム・カングル峰登山隊壮行会

JAC学生部で計画したヒマラヤのクスム・カングル峰登山隊の壮行会が二月九日午後七時より、ルームにて開かれた。出発四日前といった緊張はあまりなく、会は終始なごやかで、そして張りがあった。

当日この集りに参じたものは約五十名で、最年長が宮下秀樹氏、あとは倉知敬、村井竜一、勝山康雄、高橋聡、西村政晃、小林政志、早坂敬二郎学生部担当理事など学生部OBの各会員と、隊員を出す明学、法政や、学習院、明大、東大ほか各大学山岳部の学生で、それぞれ、これだけの人数がルームに集ることが稀れなだけに、学生たちの発言にも活力があった。

この日、出席したOBには理事経験者に加えて、現役の理事が何人もおり、学生たちにも張り合いがあったのではないかと思う。自己紹介がてら発言したOBのなかには、この学生たちの気合いを今後のJACに生かして欲しいといった内容のものもあった。

（岡沢祐吉）

山研委からの報告とお願い

昨年の山研は例年のように利用者が少なく、委員会としても何らかの方法を講じなければいけないと思案しています。差し当り今年も開所の時期が近づいてきましたが、ある会員は、車の乗入れ規制のない日に上高地に入り、翌日、山研から霞沢を目差したりして、自分の山登りに利用しています。

宿泊料一八〇〇円は何といっても魅力です。聞きなれないと違和感のある山研も、新しい会員名簿にも載っている利用の手引に従って利用していただければ、格好の宿泊施設です。今年は山研を利用して下さい。

〔自然保護随想〕

建物の外側はだれのものか

山を歩いていてそこの風景にマッチしない建造物に出会うことがよくある。無数の高圧送電塔や電波塔、各種の建築物、数の多過ぎる標柱、看板等々…だが、これらはマッチしないどころか景観をだいなしにすらしているものも多い。

「建物の外側はだれのものか」は作家なだいなだ氏の昭和五十五年に書かれた小論文である。その内容は、その頃東京に建築されたある建物の外観がまわりの風景にあまりにも不調和だったことに憤慨したもので、氏に言わしむれば、建物の内側は完全に個人のものだからどのようにしようと勝手だが、外側は多くの人の目にさらす公共のものに等しいから周囲の風景と調和のとれたものにしなければならないというのである。

まことに卓見だと思うし、当時としてはたいへん進んだ考え方だしわが意を得たりの感を強くし拍手を送ったものだった。

その文章をなぜか今、山を歩いて思い出すのである。わが先輩たちはあの上高地の帝国ホテルを建築するときいかに上高地の風景との調和に苦心したか、そしてその結果あのようにしたという話も聞いている。

自然保護運動も単に物理的な自然破壊やゴミの清掃といったものばかりではなく、いよいよ自然景観の保護にも目をむけなければならない時ではなかろうか。

自然の美は人類にとって共通の財産、宝なのである。その公共のものをちょっとした都合で勝手に無神経に破壊されてはたまらない。もはや「時既におそし」の感がしないでもないが、今後、自然保護活動のなかでこの景観は公共のものだという考え方に立って、これを守る運動を強力に押し進めて欲しい。近頃、低山歩きをしながらこんなことを思うのである。

（小倉　厚）

三水会恒例の新年山行

（金ケ嶽）

今回の新年山行は、一月七日朝池袋より小川町に入り、千三百年の伝統ある小川和紙発祥の地、東秩父和紙センターにて紙を抄くことに始まり、晴雲酒造（小川町）にて酒庫見学ときき酒をして、夕刻〝二葉〟にて新年夕食会となった。当日朝、天皇崩御の報を知り全員で黙禱と献杯をして昭和最後の夜を〝忠七（シチ）めし〟で歓談した。

翌一月八日、夜来の雨も止んだ小川町を出発、寄居駅より車にて岩根神社に初詣でをしたあと、その裏山より尾根にとりつき、時計廻り右にぐるりと旋回している尾根道をたどって金ケ嶽をめざす。正午前、金ケ嶽山頂にある春日神社下にて昼食、晴雲酒造で購入した一升瓶の中身を分けて全員で献杯、今年の幸多き山行を祈願した。金ケ嶽は円錐形の山姿で、下り道は急速に高度を下げてその麓にある長瀞七草寺の一つ法善寺に全員無事下山、解散した。

今回の山行は地図に道が明示なきため、坂倉、滝沢両姉が事前調査して安全登山に徹したこと、七十パーセント降雨の天気予報にもかかわらず、一滴の雨にも合わず幸運に恵まれたこと、そして何よりも昭和最後の日と、平成初日の記念すべき日に皆で行動できたことが特筆される。

霞たつ　平成の年　初歩き

金ケ嶽山頂にて　中　秋岳

参加者　坂倉登喜子、遠田篤子、滝沢ちよ子、大木淑子、河野幾雄、鈴木正俊、遠田榮、川上光久、片岡博、中保、高田眞哉、乾能尚、斉藤直信、岡野修、寺西邦夫、他四人　（岡野修）

一枚の写真

中村　テル

この写真で私だけが日本山岳会員としてはただ一人の生き残りとなりました。

写真前列右端は当時小バケと仇名されていました黒田正夫氏の弟の奥さまでした黒田米子さんで、一人おいて座っているのは私です。

私の右隣の沢智子（サワトモ）さんはアルトの歌手で、日本山岳会には昭和七年の入会ときいております。

後列右端の慈恵医大の先生も日本山岳会々員と思いますがお名前は知りません。（もし慈恵医大関係の方でもおわかりの方は筆者まで教えて頂ければ幸です）その隣り、後列右より二番

目は町田立穂氏でその隣りは山岳写真家として当時彼の右に出る人はいないとされていました塚本閣治氏であります。塚本氏の映写会や講演会には必ず町田氏が最良の助手として御一緒でした。

塚本氏の隣のめがねの背の高い青年は、菅沼辰太郎氏で中村貞治氏と共に奥多摩や秩父に詳しい方で、ハイキングの先駆者です。

私の右隣りの冠松次郎氏は黒部の神さまと言われ、北アルプスの黒部峡谷を隈なく歩かれた方です。

和服に羽織、袴の紳士は山と渓谷社の創立者ときいております川崎利兵衛門氏であります。その前に座っておられます中村貞治氏も小西民治氏も山岳会々員で近郊の山に非常に詳しい方々で、当時人気のある山岳人でした。

昭和十一年五月二十一日、サロメチール社がわれわれをご馳走に招待して下された山の座談会の写真です。

前列右より黒田米子，冠松次郎，中村テル，沢智子，中村貞治，小西民治の各氏。後列右より一人置いて町田立穂，塚本閣治，菅沼辰太郎，川崎利兵衛門の各氏。

山のバス停

石田喜八

数人の山党が
バスを待っている
W峠からは車道で
土埃を
憂えながら
それでも
夢心地で帰ってきた

新年のまたとない
清澄、穏和な日に
踏んだ頂や峠や
鮮やかな重畳の山々や
コースタイムを
かれらは
語る衝動に駆られている

『いつもこのコースでは
二時十分のバスに
間に合っていますが』
『山毛欅を見たくなると
M山へ来るんです』
『飲みすぎで汗を流しにきましたが
頂上でまた呑ってしまいました』

気の長い待ち時間を
まだ盛んな陽が
一角に温帯をつくって
充ちたりた顔を
いっそう高潮させ
むしろ喝采の
場にしている

六四・一・二
甲武相・生藤山

第二十七回木暮祭
碑前懇親会お知らせ

日時 五月二〇日（土）午後五時より碑前祭、同六時より懇親会。二一日（日）中央道一宮インターを経て一宮町鈴郷より徒歩一時間にて蜂城山（七三八㍍）登山、釈迦堂遺跡博物館見学、勝沼駅にて解散

場所 山梨県須玉町金山平

宿泊 右同、有井館 TEL. 0551-45-0455

交通 JR中央線韮崎駅下車、バス増富ラジウム温泉行き終点下車、徒歩一時間半、（タクシーの便あり）

会費 一泊二食、山行交通費、記念品共一人、八千円

申込 〒400 甲府市武田三―六―二七 TEL. 0552-51-3175 山村正光

締切 五月一〇日 定員五〇名

サムエル・ブラヴァント氏より会長宛に礼状

昨年晩餐会で名誉会員に推薦されたサムエル・ブラヴァント氏より、今西会長宛に次のような礼状が来た。同氏の十数年前の署名を今回の礼状にあった署名と比べてみたが、目だけでなく

次代に残そう美しい山と渓

体の衰えも進んでいることが分かる。

同氏の喜びは礼状の文面からも分かるが、ご本人の体で示されたその気持が、この署名からよりはっきり伝わって来るのではあるまいか。

「すばらしい証書と記章を受け取りました。どうも有難うございました。私の居間に記念牌を飾ることができ誇りに思います。日本山岳会の名誉会員にご指名下さったことで、貴方は私の一生にすばらしい歓びをもたらしてくれました。このことをどう感謝したらよいのか、私には表現する言葉が見出せません。

深く敬意を表し

ブラヴァント」

S. Brawand
Chalet bim Ahoren

3818 Grindelwald, 2o. Jan.1989

The Japanese Alpine Club
5-4 Yonban- Cho Chiyoda- Ku
Tokyo

Herr Präsident,
Sehrgeehrte Herren,

Die wunderschöne Urkunde und das Abzeichen habe ich erhalten und danke bestens dafür. Ich bin stolz, die Plakette in meinem Wohnzimmer aufstellen zu können. Sie haben mir mit der Ernennung zum Ehrenmitglied des JAC wirklich eine der grössten Freuden meines Lebens bereitet. Ich finde keine Worte mit denen ich meine Dankbarkeit dafür ausdrücken könnte.

Mit vorzüglicher Hochachtung

S. Brawand

1976年のサイン → S. Brawand

t freundlichen Grüssen

会員通信特集（1）

昨年十二月三日に行なわれた年次晩餐会の〝しおり〟に載った会員の皆さんからの近況を掲載します。（編集）

＊

八十五歳となり山登りは少々難しくなって参りましたが、スキーの方は年間八回、三十五日位致しております。岳友が少なくなり淋しい冬の旅です。

東京・中川喜久雄（八一五）

＊

脚がすっかり弱くなってゴルフもやらなくなりましたが、年に何回かは山梨や長野へ行って山々を見てたのしんでおります。

東京・武村市太郎（一〇三一）

＊

ソウルオリンピックの開会式に招待され、プレスセンターに協力されておられた韓国山書会長の孫慶錫教授と旧交を温めてきました。

山梨・百瀬舜太郎（一三二四）

＊

一昨年心筋梗塞にて七ケ月入院、今年血糖値異常に高いとの事で六十日余入院、まだ新宿へでる許可もなく、毎日自ら注射をやってるような始末で残念です。

神奈川・増本　茂（一四〇五）

＊

小生十二月十二日で八十二歳に到達します。毎日自転車でお得意廻りをしています。貧乏カメラマンですが、カメラを持つことで生き甲斐を感じています。全国コンテストにも浮き身をやつしています。スキーで第一、第二関節を痛めた後遺症で山にはとても登れません。

福岡・月原俊二（一四三六）

＊

月一回の山歩きを志しています。五月、涸沢岳の頂上直下よりザイテングラートの北側を落下した雪崩は稀に見る大きなものでした。十月の燕岳は晴天の下、新雪を楽しんで来ました。私の兄の早大時代の学友であった竹節作太氏の死を心からお悔み申し上げます。昭和九年正月、高山から帰る時、バスが満員で、バスにロープを結び峠越えして小坂に下った彼のスキーを思い出します。

東京・竹内佐郎（一六九七）

＊

元気に過ごしていますが老人性白内障で近く手術の予定。遠路、夜間の外出は目下手控え中です。

静岡・青木　昇（一七二二）

＊

今年は、数年前ほどではないが四十数日山へ行くことができた。印象に残ったのは五月の明神岳（栗山）。十月には雲取山荘六十周年に招かれた折、三峰神社への登拝路を五十九年ぶりに歩いたが、それも私にとって嬉しいことであった。健康維持につとめて、できるだけ長く山歩きを続けたいと思っている。

東京・望月達夫（一七三九）

＊

本を整理しようと思っていながら、つい手につきません。本は自分が好きで選んだものですから、せめてうちの人にもわかるようにしておかねばと思いつつも。

千葉・小野　幸（一八三八）

＊

相変らずの薮山歩きと、年一回ヨーロッパその他の氷河のある山を眺めるワンデルングを唯一の楽しみとして、何とか元気でやっております。

広島・泉尾忠志（二〇二〇）

＊

名残りの紅葉が梢にヒラヒラするのを前景に谷川の稜線は早くも白銀の装いに身を固め、新雪に輝く威容は素晴らしいの一語です。今年の新雪は一ケ月も早く十月早々の死者四名を出す遭難は改めて秋山の恐ろしさを思い知らされたと思います。

群馬・山口京一（二一三六）

＊

今年は遂に山には行けず、五月に八ケ岳の麓を二〜三日歩いただけでした。

東京・橋爪幸蔵（二二六四）

＊

桧枝岐より会津駒および中門岳・駒ノ小屋一泊。大津岐峠より尾瀬御池ロッジへ（十月十一〜十三日）。十三日寒波、吹雪でたちまち銀世界でこの日谷川岳で四名、尾瀬で一名凍死。山の厳しさを知らぬ人が多い。

神奈川・水沼数馬（二三三一）

＊

仕事をやめて三年。ヒマになったら

もっともっと山へ、と思っていたのに七十三歳ともなれば年に数回の小さな山とゲレンデスキーが精々です。現役部員（名大）と一緒に山へ入っていた三十代の終わりまでは一年の山行日数三十日以上でしたが…。今夏、朝日新聞に石岡兄のことが連載され、ナイロンザイルが完全なものと思われていた頃、その欠点を実験で証明した彼のことなど想い出しました。

東京・中埜愛三（二四七八）

＊

四月に前立腺肥大の手術、退院前日に薬の副作用で肝臓障害で退院がおくれ、八月下旬にやっと退院、こんな有り様で今年一年は休養の年になりました。県内の友・斉藤平七・藤島玄両氏の死を悼みます。

新潟・宮島孝一（二六六〇）

＊

寄る年波で身体の各処にお医者様の御厄介になる事が生じ、目下鋭意治療中です。

東京・内山正二郎（二七一九）

＊

六十三年度の半分は病院生活でした。幸いにも元気になりましたが、もはや登山は無理です（七十七歳）。会報が楽しみです。

福島・川又恒一（二七二一）

＊

烟雨流水江南春　碧落氷雪嶺北秋
残夢幾片暖牀内　幻花数枝東籬外

埼玉・千谷壮之助（二七六九）

＊

本年はロータリーの地区ガバナーを拝命していますので、そちらの仕事が忙しくて出席できません。

富山・若林啓之助（二八二四）

＊

入会いらい何らなすところなく四十一年を経過し、感慨新たなるものがあります。東北の山村の一介老農として、あと六ケ月で八十歳という年齢を迎えます。健康を損ね山へも登れず、車での自然探訪を楽しんでおります。

福島・久木春男（二八六三）

＊

小生八十七歳、晩秋の尾瀬山行はどうしたかなあと、老人的心配をしてました。十分注意しておやりなさいと警告した手前なので。日本山岳会も老齢化しないように祈っていますが、やはり昔はよかったなあとも思います。山は男のみそぎ場所なのだから。

福島・斉藤啓助（二八六六）

＊

去る九月十六日、山研に宿泊させていただきました。管理の方とも対談でき気持ちのよい一夜を過ごさせていただきました。

広島・本片山数雄（三〇八七）

＊

先日、快晴に恵まれて鹿島鎗スキー場から小熊山を縦走しました。新雪の鹿島鎗と爺ケ岳を終始眺めてのすばらしい旅でした。会報で次々とご存知の方の訃報を知り寂しく思います。

長野・丸山　彰（三〇九八）

＊

五月はヨーロッパアルプス、十月はネパールヒマラヤ、それぞれスケッチ旅行滞在。八月利尻から屋久島までオートバイ山岳ツーリング。ただし途中で挫折、未完成。

兵庫・田中邦彦（三四二三）

＊

老人になって思う様に登れないので山麓を散歩したり、ロープウェイ等の乗り物で高い所から自然の風景に接するのを楽しみにして居ります。会合に出ても耳が遠くなって困ります。満八十九歳。

山形・石井貞吉（三五二五）

＊

秋田支部主催の東北集会に参加、旧

知の岳人との懇談、山行で心身ともにリフレッシュしました。十一月五日、私の山の植林も終え、今年の育林作業終了。

山形・金森繁三郎（三六三七）

＊

第四十三回京都国体で日本体育協会長より表彰状受賞しました。第四回以来、監督五回、大会役員十六回、県選手団副会長五回、同顧問八回、計三十四回と沖縄復帰国体に参加。お陰で元気です。

愛媛・松長晴利（三七一六）

＊

全日写連、朝日新聞社主催立山撮影会（七月三十一日）で特選と入選を知らされました。

埼玉・太田　繁（三七四四）

＊

現在拙宅を広島県民芸協会の事務所にしておりますが、かつて松方三郎さんは東京民芸協会長をしておられました。もっと前の昭和二十四、五年頃、お茶の水のルームの崖下に共同通信のクルマが着き、原全教さんが周章てて梯子を下ろしておられたことがあったように記憶しております。懐かしい思い出です。

広島・青木　巌（三七七八）

＊

三重県の地名について、読売新聞に連載しています。山名、峠名、谷名、高原名といったところを毎日書いています。

三重・倉田正邦（三八二二）

＊

今年は長雨にたたられたのと、八月末に山の絵「三人展」を開いたので夏山は行けませんでした。

神奈川・根本　進（三九〇七）

＊

今年は五月から九月までの間、三ツ峠山へ十回登りました。亡びゆく高山植物を絵に残そうと思い、昨年から始めたのですが、あと何年かかるか、気長に続けます。現在約一五〇～二〇〇種できました。

東京・小駒山人（三九一一）

＊

病院で眼の手術をして、今家で療養中です。

東京・鶴岡元之助（四一三七）

＊

八十五歳の老骨にむちを当てながら日々をすごしています。毎月の「山」を見ることが何よりの楽しみです。

頭髪の枯れゆく夏をなげきつつ
陸奥山に別れつげたり

一昨年岩木山に登りました。

広島・小田正男（四一七二）

＊

移り住みて槍常念を仰ぎつつ
うれしや岩に咲く花思ふ

長野・清水悟郎（四二一二）

＊

一昨年スポーツコレクションを作りました。だんだん充実してまいりまして蔵書等も四〇〇〇冊を越え、展示品も山岳用品、スキー用品を主にまた目録も整備できました。御参観をお待ちしております。

長野・小山　智（四三〇三）

＊

近頃はもっぱら国東の古寺巡りや九重高原を散策して自然に親しんでおります。

福岡・熊谷松雄（四三五〇）

（次号につづく）

縄文杉は訴える

三島　昭男著

本書は緑の大切さ、自然の尊さとともに、自然をないがしろにするような人類であればやがて破滅することを強く訴えている。著者は朝日新聞の編集委員として環境問題を七年間担当した。また一九八七年京都でグリーンルネッサンス「緑維新」を発足させた一人である。緑維新とは、日本のみならず全地球的な危機をもたらした消費文明を見直し、二十一世紀に向かって地球上の動植物すべてを含めた万類共存の生態系（当然第一に緑がある）を守る方向で進む―そのためのルネッサンスといってよいだろう。

本書は五章からなる。一章は、高橋延清東大名誉教授（森づくり第一人者）、岸根卓郎京大教授とともに樹の怒りを目撃し、緑維新を志すことから始まる。さらに、緑の文明シンポジウ

ムから、日本の森一〇〇選とつづく。二章は「科学と自然の調和をめざして」のテーマのもとに、フランスのメッセゲ氏、福井謙一氏（ノーベル化学賞）との対談、そして三氏が「吾唯足知」の心で一致する。三章は、文明の危機と大黄河緑化の遠山正瑛鳥取大名誉教授について語られる。四章は、緑維新の発足と二十一人委員会（二十一世紀に向けての意が含まれている）について述べられており、拝聴すべきことが多い。五章は、井上靖氏との対談とともに、屋久島縄文杉のことで結んでいる。

縄文杉の寿命は七千二百年といわれており、観光のためのロープウェイなどとは、縄文杉はもちろん屋久の自然を破壊するだけのことである。日本山岳会でも、自然保護に力を入れているし、また昨年七月二十日付で、縄文杉向けのロープウェイの件で関係者に要望書を提出している。私自身、昨年屋久島で著者に会って、緑に対してなみなみならぬ情熱を感じた。自然保護関係者のみならず、山関係者にとって必読の書であるとともに、日本人すべてに読んでもらいたいと思う。

一九八八年六月刊、新潮社、二三六頁、定価一一〇〇円

（松本徑夫）

白鳳 第六号

白鳳会編

白鳳会は山梨県韮崎市に本拠を置く山岳会である。創立は大正十三年。現存する国内の社会人山岳会では二番目に古い歴史を誇っている。

この会では十年ごとに会誌を発刊しているので、本号は六十周年記念誌である。前五号は「岳人」会誌コンクールで特別最優秀賞に輝いている程、そのレベルは高い。

創立メンバーに、韮崎のいわゆる旦那衆四十人が名を連らねた。そして登山を文化的にとらえようという伝統は、現在百名ちかい会員を擁しながらも脈々と受け継がれている。

本号も、還暦という御祝儀的なものを除けば、中身は濃く、しかも変化に富んでいる。元会長の山寺仁太郎氏が前号に続いて、会の略史を豊富な資料を駆使して昭和中期まで書いている。氏は「大鳥ヶ嶽に遊ぶ記」文政七年九月、生山正方述の発見者として知られている。大鳥ヶ嶽とは鳳凰山のことである。

座談会では、年配、若手の会員をまじえて戦中戦後の会の動静をさぐる。特に、甘利山椹池々畔の会の山小屋、白鳳荘の建設について重点的に語られている。

特集記事は、六十周年記念式典や、かいじ国体に、役員として二十六名の会員を投入し成功に導いた報告。また六十周年記念の、ボルネオキナバル峰の登頂記など、いずれも色刷り写真とともに紹介している。

十年間の成果として、仙丈岳、北岳、甲斐駒ヶ岳、鳳凰山の集中登山記、その他、大武川支流の各沢のトレースなど、地元に密着した会の取り組みが浮きぼりされている。

また、大正十二年鳳凰に登った大町桂月。昭和九年に地蔵岳で発見された「掛仏」（鋳造）や明治十二年版行の甲斐駒ヶ岳の略図。大正十二年調査の南ア登路概念図など貴重なものが写真で掲載されている。会員の山行記も国内外を問わず、その行動範囲の広さ豊かさを伝えてくれる。

とかく会誌というものは、第三者には読まれにくいものである。しかし本誌は、編集者の努力もさることながら、さすが六十年の伝統と思わずにはいられない程、魅力に満ちた内容だ。

実費二千円で、韮崎市中央十―二十四の事務所で入手できるが残部僅少とのことである。

B5、一六五ページ、一九八八年八月発行、白鳳会刊、非売品

（山村正光）

双星の輝き

久保 博司著

山小屋の主人というのは、一日山を歩いてきた登山者に対して疲労した身体を休息させる憩の場所の提供者であり近辺の山域を熟知した、山の権威者であり、指導者である。したがって人によってはある種の畏怖感をもたれたり、伝説めいたカリスマ性を秘めた語られ方をしたりしたものだ。槍ヶ岳の穂刈三寿雄や雲取小屋の〝鎌仙〟こと富田治三郎等が、その部類に入るが、穂高の今田重太郎もその中の一人に数えられるであろう。

一日の山行の充実感に満ちて山小屋にまどろむ時、彼等小屋の主人から聴く山の話は、かなりおしつけがましく、抵抗感をおぼえる場合もあったが、当該地域を知りつくした権威者の語る言葉として心うつものもあり、常日頃の生活の中では、耳にできない、至言として心に残るものが、あるものである。したがって彼等を磨き上げてきた、山の生活、あれこれの実相について書かれたこの著作については先に出た「雲取山に生きる」（新井信太郎）に続き興味深く読ませてもらった。穂高にどうしても山小屋を造ろうとの信

念にもえた今田重太郎と、これを継いで、現代風のアイデア山荘主としてパーフォームした英雄とはものの考え方で全く相容れぬ関係だったようだが、著者は、彼等のいずれを是とし、いずれを否とする立場ではなくそれぞれに輝きをもたせて、スマートに書き上げている。かつての伝統的なカリスマ性を秘めた、今田重太郎の哲学には、現代では失われつつある山屋の魂が、感じられ、心ひかれるものがある反面、新世代の今田英雄には、現代人の趣味

としての登山「遊び心」を具現化するための登山という立場に立って山荘の改善を貫き通して、今日の人気山荘にあらしめた現代経営の知恵が光っている。

あまりに、お互に相容れぬ立場の二人を二代記として書くことに気が進まなかったとあとがきで著者は苦心のほどを吐露しているが、それだけに、二人のコントラストをうまくつけて、書名の通りそれぞれに巨星の輝きを付した点はみごとだと思う。

一九八八年九月、山と渓谷社刊、一九七頁、定価一二〇〇円

（小塩丘平）

北海道の自然

淡交社

素晴しいと、多くの人が憧れる北海道の自然は、人類の宝ともいえる。

今度、北海道に縁りある五人の写真家により宝石箱ともいえる北海道の自然五冊が刊行された。㈠四季の彩・後藤昌美、㈡聖誕・工藤勝彦、㈢釧路湿原・表優臣（マサミ）、㈣大雪の四季・成松岳人、㈤日高山脈・兼本延夫。

原生の中に生物、四季の変化を時々刻々、根気よく待ち続けた血と汗の結晶。さり気なく撮っている風景や生物の写真は、何日も何日も、一瞬の時を追い続けた、心根優しき Nature Photographer の目によるものである。

北海道に住み周囲の風物を執拗に狙い、季節の移り変りを撮るため、太陽が昇り、沈むまで、光と影を、山に、生物に求め、そして一瞬のシャッターに燃焼させた凄じい眼は、というと、自然に対しては優しい眼なのである。この写真集は、北海道の自然の魅力を

山岳技術考

金坂一郎遺稿集

遺稿集編集委員会

桜門山岳会で後輩に当たる七人の編集委員によってまとめられた、独自性の高い故人の論文集である。

金坂一郎氏は、わが国登山界の多くが認める優れた指導者であったが、その活動力は著作だけでなく、実践の場でも広く発揮された。巻末にある座談は、登山人としての故人の業績を読者に伝えるだけでなく、その人となりを彷彿させて興味深い。

著作歴・略歴によれば、「山岳」四十八年に発表されて話題になった「確保論」以来、専門誌などに掲載されたものは、主として〝確保技術と用具〟、〝雪崩とその遭難防止〟についての論述が多く、本書もこの両者を編集の中核にしたように思える。

これらを読んで感じるのは、論文の多くが、先ず科学的な論理性を基盤に持っていることで、あいまいさを排する著者の姿勢がよく現われている。雪崩についての研究もその資料はヨーロッパやアメリカの文献にも及び、いわば、比較雪崩学ともいえそうな視点から発生の原因究明や分類にも力を注ぎ、旧来の誤りを指摘している。

そしてなお、その理論の上に本人の実際の経験を重ね、雪崩遭難の最大の要因が、あくまで、人間の行動の誤りにあることを強く警告している。登山の指導者はもちろん、積雪期登山、海外登山者の熟読すべきものが多い。

動的確保の技術は、現在、クライマーの基礎的技術として普及定着したといえるが、墜落の系数とロープ張力の関係を数式で説明し、その確保法の重要性を説き続けた故人の功績はきわめて大きい。本書には、その足跡という意味で古い論文も収録され、用語や、器具・技術上の解説で、もちろん、現在のそれにそぐわぬ部分もあるので、著者が、特に理解の平易さを心掛けて執筆した、一九八五年文部省発行の「高みへのステップ」中の確保理論（積雪と雪崩も同様）を併読されるとよい。

「論説」のうち二篇は、終戦直後の出身大学山岳部の活動と、その事故に対して、若手OBとしての部に対する思い入れがいきいきと描かれ、他の二篇では、冬山や高所登山

堪能させてくれる書である。

一九八八年七月、淡交社刊、九五頁、定価一六〇〇円

（平野　明）

大雪山

市根井孝悦写真集

北海道の屋根と言われる大雪山を紹介した本はこれまでに数多く出ている。山の集合体としての大雪山のスケールと、その特徴的な山容とは登山家だけでなく広く人々の関心を集め、植物的には世界でも珍しい規模の大きなお花畑の存在で知られてきた。

こうした特徴ある景観を写真家が見逃すはずはなく、今までに幾つかの優れた写真集が発表されている。

この写真集『大雪山』の著者、市根井さんも、先にB5変型の小さいが美しい本を出している。これは小体だが見事な写真で構成されていて、美しいガイドブックの感があった。しかし、版が小さいというのは写真集としてはやはり有利ではなかった。

今度の写真集『大雪山』にはその問題はない。ここには大雪山の山の大きさに相応しい華麗な写真が展開している。雪解けから花の春と夏、そして日本でもっとも早く来る豪華な秋色を経て雪に閉ざされる冬までが余すところなく描きだされた。

人さまざまであろうが私はその中でも秋色のピウケナイ沢と、ウラシマツツジの紅葉に彩られる黒岳のシーンが気に入った。それはただ美しさだけでなくて大雪山の特徴をよく表すものだからである。

言うまでもなく、その他の写真もそれぞれに或いはこの壮大な山地の地形を、気象を、植物景観をよく表している。著者があとがきで述べているように、神奈川県に匹敵する面積を持つこの山地を七〇点の写真ですべて網羅するのは無理なことである。しかし、この本からは十分に大雪山のイメージが伝わる。それは著者自らが『頭の中に描いていた山の姿や季節感をほぼ表現しえたのではないか』と述べているように。

巻頭に三浦雄一郎氏が『大雪山・もっとも美しい地球の素顔』と題して随想を寄せている。それ以外には個々の写真についてなど、余計な説明は一切無くてきわめてすっきりしている。表紙もカバーもかなり地味だが、手に取った人は扉の鮮やかな紅葉の写真に打たれるであろう。

一九八八年八月、山と渓谷社刊、定価四八〇〇円

（辻井達一）

画文集　山旅素描

足立真一郎著

著者は日展会友委嘱、光風会評議員、日本山岳画協会名誉会員である。白馬山麓にアトリエを持ち作品には北アルプスのほかネパール、スイスなどが多い。本書は、著者が永年に亘って山登りや旅行の都度スケッチしたものを纏め一冊にしたものである。「好きな山歩きでも孤独をしみじみかみしめることがある。普段考えても見なかったことが浮かんできて、思い出はより深くなる」云々。画の良さは当然ながら、添えられた文章は少しも気取らずに、さらりとした著者の人柄がよく出ていて、好感がもてる。そして色彩感覚にも行動にも画家というものがよく現われている。

たとえば「その朝は変わった槍ヶ岳の構図をとって見たかったので、誰よりも早く小屋を出た。夏の明け方とは思えないほど寒い。飛騨側にくだった私は、カンバスを前に立てかけてしっかりと岩角にささえ、腰だけは自由に動ける姿勢になって、朝陽を待った」（「夏山の匂い」穂高）

安曇、北信、東北、伊豆、西上州、木曽など幾つもの峠路、山、山里など、冬は冬の、春は春のそれぞれの趣きを描いた画と文九十篇には旅の哀歓が漂っている。

本書はどのページも画と文のために充分スペースをとってあるから、両者とも生き生きしている。どこを開いても失望することは無い。また著者の郷里足利付近を題材にした「早春の峠路」「風薫る上州路」などは、文章も稍長く立派な紀行である。石を屋根にのせた徳本峠の小屋や小谷の湯宿も懐しい。表紙に小さくきちんと入れた槍ヶ岳の色彩画と口絵に入れた三ページ大の剣岳の色彩画が、本書を品位のあるものとしている。山への関心を誘う一冊である。

山岳技術考

時の事故防止についての心構えを説いている。

その他、論文として「山スキーの技術」。隊長として参加した一九五八年ヒマルチュリ偵察時の行動報告の外、青年期の山行記録や詩・短歌があり、写真十数葉がまとめて収められている。あとがきでは、単なる追悼集でないものをとの方針であった由だが、編集担当者が故人の人柄に持った確かな目と、その追悼の想いが十分理解できる一冊である。

一九八八年六月、茗渓堂刊、三八〇頁、定価二五〇〇円（松永敏郎）

一九八八年六月、新ハイキング社刊、二〇〇頁、一六〇〇円

（川崎精雄）

会務報告

一月理事会

一月十二日午後六時三十分

場所　本会ルーム

出席者　今西会長、大塚副会長、大森、岡沢、橋本、大橋、関塚、織田沢、太田、浜口、田部井、早坂、西村、新井、小林、勝山各理事。小倉、山野井各評議員

委任　村木副会長、松永理事、平林評議員

審議事項

○大宮市立博物館「チョモランマ登頂展」後援の件　承認

○「山岳総索引」製作経費の一部負担について　承認

報告事項

＊大塚副会長…役員の交代について

＊財務…事業報告、計画の提出について

＊自然保護…二月十九日自然保護観察ハイク予定

＊科学…秩父宮記念学術賞推薦について

＊医療…第九回日本登山医学シンポジューム六月十日、十一日に開催

＊婦懇…一月二十四日新年会開催、二月二日この人と山を語ろう「今井通子さんを囲んで」開催

＊学生…一月十七日遠征計画検討会、二月九日クスム・カングル登山隊壮行会開催、二月十三日クスム・カングル登山隊成田発

＊指導…チョモランマ友好登山隊タクティクスを中心としたシンポジューム開催、日時未定

＊総務…三月十一日新入会員オリエンテーション、四月二十三日サクラハイク、五月二十六日JAC総会開催について

（1月）

9日　総務委員会

11日　理事会、婦懇

13日　資料委員会

17日　学生部指導委員会

18日　三水会新年会

19日 図書委員会新年会
20日 科学委員会
23日 自然保護委員会
24日 婦懇新年会
25日 青懇・集会新年会
26日 フィルム委員会
30日 常務理事会
31日 海外委員会新年会

1月来室者253名

会員異動 1月

退会

日露 潤二（八五〇四）
富永志磨子（八三五七）
稲越 利夫（八七六二）
伊集院正樹（九一九四）

物故

古川 竹世（九一六〇）88・12・19
高橋 晋作（八九〇八）89・1・22

☎ 234-6659
この電話でもお知らせしています

⊙図書委員会の催し

●第20回山岳図書を語る夕べ

テーマ 松方三郎の山と本
講師 島田巽氏・田口二郎氏
日時 平成元年四月八日（土）午後三時より
場所 日本山岳会ルーム

●第26回「この一本展」

テーマ 松方三郎の山岳関係の文献について
日時 平成元年四月八日（土）午後三時より
場所 〝山岳図書を語る夕べ〟の会場に展示します。

図書委員会

＊

⊙シンポジウム開催

「三国登山のタクティクスを振り返る」

日時 四月六日、午後六時半より
場所 本会ルーム

重広・磯野両面チーム・リーダーと若手隊員による、計画と実際についての報告と討議を行ないます。若い会員諸氏の参加を歓迎します。

高所登山研究委員会

＊

⊙新会員交歓・さくらハイク

・四月二十三日（日）
・小田急線秦野駅前十時集合
・コース 秦野駅―権現山―弘法山―吾妻山―鶴巻温泉駅 （雨天中止）

問い合わせ、参加申込みは事務局まで。資料を送ります。

総務委員会

⊙シヴァ峰報告書

（88年インドヒマラヤ）

カラー写真が美くしいと好評です。まだ少し残部がありますので御一読下さい。

頒布価格＝送料込千五百円
申込先＝〒102東京都千代田区四番町五ノ四 日本山岳会事務局宛

婦人懇談会

＊

⊙にどだもれ（愛の巣）

元海外委員牧野文子追悼集

生き方の一つの指針になった。回想を超えて牧野夫妻の生きた時代の研究になる。是非御一読を!!

まだ少々残部があります。

頒布価格＝二千九百円
送料三百円
申込先＝日本山岳会事務局

海外委員会

編集後記 冬のマッキンリーで消息を絶った山田昇会員と、三国合同登山のテレビ隊で活躍した三枝氏ら三人の捜索は難行とのこと。会報がお手元に届くころには結果がでているだろう。

▼あれほど周囲の期待を担っていた日本の登り手たちが、ここ数年のあいだに何人も山で命を失っている。

▼この会報でも何回か取り上げられたフリークライミングは、ますます欧米諸国で流行し、競技としての体裁も確実に整い、どこかでオリンピックの公開競技に、と提案する可能性さえ否定できなくなった。

▼岩登りに競争原理を持ちこむことを拒んだメスナーもこのすう勢を抑えることはできなかった。

▼うたかたの世の変遷とは先の会報で麻生さんが使った言葉だが、どうか先を急がないで欲しい。 （O）

平成元年三月二十日
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 今西寿雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座 東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六 赤坂グレースビル
印刷所 株式会社 技報堂